

山に村があつたころ

安溪遊地
安溪貴子

— 沖縄県国頭村楚洲・長嶺徳山さんのお話 —

はじめに

二〇〇六年十二月二十日から二十四日まで、総合地球環境学研究所(地球研)の「日本列島の人と自然」プロジェクトで、沖縄島の北部を訪れました。本誌でもおなじみの湯本貴和リーダーからの研究課題は、「自然の賢明な利用とは何か」という、現代人にとっての頭痛の種のようなものです。しかし、いっしょに調査に加わった仲間と合宿形式で学び、夜は泡盛を酌み交わしながらおおおいに語る中でいろいろな気づきを得ることができました。夏の奄美調査(前号で報告とは違って、旅のアレンジは沖縄在住のメンバーにすっかりお任せして、山の中をえんえんと歩いて、人間の活動の跡を探し、麓に降りては昔の生活に耳を傾け、現在の夢を語りあうという充実した経験をさせていただきました。

旅の仲間は、いずれも沖縄在住の五人の研究者、当山昌直さん(オカヤドカリ屋)、渡久地健さん(サンゴ屋)、盛口満さん(生き物屋)、早石周平さん(サル屋)、佐藤綾さん(マングロープを歩く虫屋)と、西表島で調査中の京大院生・蛭原一平さん(イノシシ屋)でした(専門は、ゲッチョ先生こと盛口満さんの新刊書『生き物屋図鑑』にならって表記)。さらに、奥間川に親しむ会から、親川栄さん(司法書士)と浦島悦子さん(フリーランスライター)にも参加していただくことができました。

調査後半の十二月二十二日から二十四日にかけては、沖縄島最北端の国頭村を回りました。とくに、昔、山の中に人が住んでいたという、ユッパという村の跡と、奥間川流域から沖縄島最高峰の与那覇岳周辺にかけてと、北側の西銘岳周辺での人間の生活の跡を追いかけました。親川さん、浦島さん、当山さんの案内によって普通では気づくことが難しいような生活遺跡の数々を見せていただくことができ



ヤンバルの森・ユッパ一跡遠望

たことを感謝しています。

今回ご紹介するのは、国頭村東海岸の楚洲^{そしゅう}にお住まいの長嶺徳山^{ながのりんとくやま}さんです。長嶺さんは、大正六（一九一七）年二月のお生まれの満九十歳。二〇〇六年十二月二十二日にお宅でお話を伺いました。国頭村議を十六年間つとめ、山林の活用事情についても非常に詳しい記憶をおもちの方です。下原稿を詳しくチェックして、さらにご本人に確認をとってください。た浦島さんと親川さんに感謝します。当山さん、渡久地さんにも協力をいただきました。

山の中の別天地ユッパ

山原（ヤンバル、沖縄島北部のこと）の山の中にユッパ（注、大正十年測図、十二年発行の参謀本部陸地測量部の地図では、横芭、ふりがなはヨコッパ）という所があります。ヤマトウグチではヨコッパともいい、地図には「横津巴」と書いてあるものがあります。まわりは国有林が多く、海辺の村の我地^{がこ}に降りるのに五キロくらい歩くような山の中です。明治末、大正初めころから人が住んでいましたが、昭和四、五年にユッパの人たちはほとんどが国有地から追い払われて廃村になりました。ただ山城さんという人がひとりだけ戦後まで残っていました。

ユッパは我地や伊江とおなじように楚洲の管轄で、区長は楚洲にいました。役場から用があるときなど、みなバラバラに住んでいて家族数は少ないし家は谷間谷間にあるので人を探すのはたいへんでした。先輩の話では、ユッパには一番多い時で五十

三軒あったといひます。私がわかる範囲では、二十軒くらいしか記憶にありません。我地も今は廃村になっていますが、楚洲から三キロほどのところにあつて、多いときには二十軒で百二十名もいる村でした（注、大正十年二月二十四日の国頭村の記録では、楚洲全体の八十七戸四百三十二人のうち、横芭が十五戸六十人、我地は十三戸五十二人、伊江には九戸四十五人と報告されています）。

山の村ではユッパが一番たくさん家がかたまつていましたが、この他に西銘岳、辺野喜川上流、伊部岳^{いべたけ}など山の中に散らばつて住んで山仕事する人たちがいました。（大正時代の地図を見ながら）西銘岳の近く、今の辺野喜ダムの上流にも家の印があるでしょう、ここにも五、六軒の家がありました。

西銘岳の周辺には大正末か昭和初めくらいまで人が住んでいましたが、ユッパと同じころに国有地からは追い出されました。残つたのは二、三人でした。

そのほかに、伊江川本流沿いの山の中に宜保開墾^{いほくわん}というのがあつて、有名でした。これは首里出身の宜保という人の土地で、十町歩ぐらいの畑があり、芋をつくつて農業だけで暮らしていました。自分の土地だから追い出されることはなかったんですね。宜保開墾の跡にはウワフル（中で豚を飼う便所）の跡が残っています。家は本土の馬小屋のような簡単な作りで、豚を養い、飲み水は山の川から汲んで担いできていました。

ユッパは、あちこちから寄り集まつた寄留民の



部落でした。たとえば「ジノンヤー」という屋号の家がありました。これは宜野湾(方言でジノン)から来た人です。ユッパーで生まれた人もいます。フミさんという女の人ですが、その後、我地に降りてきています。出身地は他には本部、首里、那覇など。独り者が多かったですね。夫婦ものでも子どもはそれほど多くなかった。子どもはみんなで十四、五名でしたか、一番近い楚洲の学校に出ました。

ユッパーには一癖ある者が多く暮らしていました。例えば、負債で追われて逃げてきた人とか、人の妻をこっそり連れてきた人とか。こっちに隠れたら大丈夫ですからね(笑)。ヤンバルはとても広い

し、山の中に道がないから、探しにきても見つけきれなかったんです。

ユッパーでは、ばくちも盛んでしたよ。沖縄バクチャー(ばくち札)はわかりますかな。花札のようで一、二、三と数字がついているものでした。一癖はあっても悪い者とか暴力を振るうというような人たちではなく、踊りや芝居なんかも上手な、人情味のある人たちでした。まあ、いうならば、いろいろなジンプン(生きる知恵や技)はあるけれど、世間の競争を逃れた人たちが、安心して暮らせる上等の居場所というような雰囲気でした。

ユッパーの山

ユッパーでは山を切り開いて五坪から六坪くらいの家を建てて住んでいました。掘った立小屋で、土を掘って柱を立て、屋根は竹ガヤで葺いた家でした。食べるほどの畑をつくり、イモを植えていました。田んぼは川のそばにわずかしかなかったです。現金収入は農作物でなく山稼ぎだけで生活していました。林産物は角材がほとんどで、木を切り倒して丸太から斧ではつって四角くしたものを泡瀬(うま)か与那原(よなはら)あたりに出しました。那覇へは遠いからめったに出さなかったです。

皆さんがおられるこの部屋の、その敷居と柱は、兄と私で製材して山から担いできたものです。ユシギ(和名イヌノキ)、シー

ジャー(イタジイ)とスギを角材として出しました。スギは当時すでに造林されていました。あとは自然木で、他にもチャーギ(イヌマキ)やイク(モッコク)を柱にします。瓦屋根のキチ(垂木)には、イクの丸太のイクギチやチャーギなんかを丸いまま使いました。シロアリが入らないですから。

木炭は、大正四、五年ごろ、奥、楚洲辺りにヤマトウの指導員が三名来りました。ひとりは所谷という人で、こちらの女性と結婚しましたが子どもができなかったので、養子を四国から連れてきて、その子が校長までやりました。所谷さんは、田名の平坦地に住んでいました。ですからそれ以前まで、このあたりでは本当の木炭は作っていなかったことになりました。それまでは「ウスイガマ(覆い窯)」といって、木を燃やして上から土をかけて作る消し炭のような軽い炭でした。

昔は陸路が発達しないから、林産物でも何でも海路で船から運んだものです。陸路は人の足だけで、食料なんかの物資は海から来たんです。ユッパは林産物を我地にもって降りて交換してはいろいろな物をもってきていました。

産物とともに船や人が行き来すれば、移住したり結婚したりということも当然あります。私のおじいさんは与那原出身ですが、楚洲に通ううちにこっちで生まれた男の子を跡継ぎにしました。それが私の父です。

当時、楚洲から出していた産物は、角材、薪、竹、ナーベラ(へちま)などの棚材、木炭、シャリンバイ

の染料、砂糖樽のくれ板など、山のものが何でも金になった時代でした。土地も何ももたない人でも、持っているものは額の汗だけでも暮らしていったんです。他の村では樟脳づくりなどもありました。

ユッパは、二十五年間くらいだけあった山の中の村です。当時、こっちに來たらなんかかんか仕事はあり、失業ということはありませんでした。山の材木でもなんでも、山に入って何かとってきたら金になったのです。ですが結局、とりすぎて山が荒れてしまったために、国から立ち退き命令が出たと聞いています。

ティカチ(和名シャリンバイ)のエキスを染料用につくる釜場をヤマトウンチュが造って、山の中になりました。あれは薪がたくさん必要ですから山の中でないと作れません。

—ヤマモモの樹皮の染料は作りましたか。いや、私の記憶ではシャリンバイだけでした。砂糖樽のくれ板は、昭和六、七年ごろ、辺野喜に製材所ができましたが、それまでは一枚ずつ割ってからけずって出していました。材が軽くて、まっすぐに割れる木を使いました。

—(親川さんが模型を出して質問)こんなものが山の中にあるんです。火を下から焚いて釜をいくつも置いて、上の方には煙突が

▼炭焼き窯の跡



▲川辺のエキス釜場跡



いています。樟脳製造の跡でしょうか。

樟脳づくりは奥が主で、このあたりではやっていませんでした。ほう、これはエキス釜ですね。小学校を出たばかりのころ、ここから一キロ半ほど山に入ったところに工場がありました。やり方はだんだん煮詰めていく黒砂糖づくりと似ていました。子どもでしたからあまり詳しくはわかりませんが。この辺のシャリンバイは、山だけでなく海岸のものも全部この工場にかついで出したんですよ。だからこの辺のシャリンバイは一回は伐られています。昭和五、六年のことです。初めは山のもの、樹皮を剥いでつくっていましたが、海岸のものは木が縮まっているので皮だけでなく木まで取りました。材料を切り尽くして、このエキス工場は一年ももたなかったです。藍は谷間の木の陰でないと育ちません。今もアイ(和名リュウキュウアイ)の草は川の上流なんかに残っています。大きな「エーチブ(藍莖)」で、アイの葉を醗酵させて固くして出しました。藍作りには本部からその技術をもった人がたくさんきていました。エーチブは伊江川の上流なんかの山の中に跡が残っています。できた藍は、奄美大島あたりに送りよかったですよ。まだ私が小学生のころでした。

— 刃物はどうしておられましたか？

刃物は朝研げば一日大丈夫でした。欠けた鋼の修理は鍛冶屋がいる奥まで歩いて修理を頼みに行きました。昔の道を歩くと楚洲から奥まで一時間四十分かかりました。海岸に降りて、浜づたいに半分、山道を半分くらいです。浜道は潮が深い時、岩に棒を

立ててそれにすがって上がったたり下がったりする所がありました。棒で測ってそれより上に潮がきていたら着物のすそをからげて、ヤックワン(傘丸)が濡れないようにサナジ(種)を外して肩に担いで通りました(笑い)。女はそうもできんから濡れたまま通るんですが。ナゲーという地名の所です。そこしか降りられないから通ったんです。

怖いものはヤンピシャ(山筆者)とハナ

山で暮して怖いものがありました。国有林や県有林の管理をする役人の「ヤンピシャ(山筆者)」です。「ヤンピシャ事件」というのもありましたね。ノイローゼで自殺だったのか誰かの恨みをかけて殺されたのかわからない、あるヤンピシャの変死事件でしたが、公務災害ということにしたものだから、それじや下手人は誰だということ、村のものは長い間、肩身が狭いやな思いをいたしました(『国頭村史』三三五頁によれば明治四十一年のできごとです)。ともかく世の中で怖いものはヤンピシャでした。今でもヤンピシャに追われる夢を見ることがあります。

— 捕まったらどうなるのですか？

道具を没収されます。オノをとられるともう食べていけません。捕まる人はけっこういました。部落で相談して「許してくれ」ともいいました。国有林から県有林へ出たところで捕まるんです。でも現行犯でないといけませんから、要領よくやったものです。国有林と県有林はそれぞれ別の管轄です。だから国有林と県有林の境界のところにいけば取り





縮まりを逃れやすいわけです。ヤンビシヤの取り縮まりは毎日あるものではなかったですから。
 その他に怖いものといえば、ハブは今でも怖いのが、気をつけていればいいのでそれほどまでは恐れなかったです。それに最近はずいぶん少なくなっていますね。ほとんど見かけないと言ってもいいぐらい減っています。

糸織田の楚洲村の昔

ユッパの住民の中には、国頭村出身の人が那覇の辻(遊廓)があった)で若いジュリ(遊女)に惚れて、連れてきてしまったという人もいましたよ。駆け落ちというよりも、年季が明けないうちにお金も払わずに奪ってきたということでしたよ。名護から北は全部がヤンバルだから広くて道もないし、どこってわからないのだから山に逃げ込めばもう探しきれないでしょう。大正初めころは、那覇から名護まで馬車を通る道があったぐらいのことでしたから。

—「お願い、あたしを盗んで逃げてー」なんて、小説になりそうですね。

別嬪さん(ベロビク)だけけれど、ここの暮らしになじんでいました。体が大きくて力があって、一斗甕を頭にのせてこの山を上がりおろして暮らしていました。この女性は那覇の人でしたが、こちらで長生きをされて

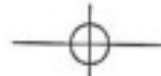


▲昔の人が使ったピン

八十八歳のトーカチの祝いで盛大にやりました。
 与那原から船で駆け落ちしてきた人妻もありましたが、この人は、ある年の五月二十五日に、ふるさとの綱引き行事をやってみようというので、縄をつくって子ども達に綱引きをさせたそうです。そうしたら、大人たちが子どもの加勢をして、それがとうとう今では年中行事の綱引きとして定着しているんですよ。だから、あの女の人が楚洲の綱引き行事の元祖です。

楚洲には、沖縄中の三十七マヂリ(間切、王府時代の行政単位)から集まったものがおった、といわれたんですから、行事もいろいろなところからの集まりでした。楚洲には沖縄の祭は皆ありましたよ(笑)。お盆のエイサー、旧暦五月のハーリー、綱引き、シヌグ(注、稲の刈り上げにあたり山から神々が来訪)、ウシデーク(注、白太鼓、女性が円陣を作って踊る祭祀)、今は豊年祭と呼んでいますが「ムラアシビ(村遊び)」などです。昭和の初め頃、ユッパの青年二十人ほどが本部落の楚洲に降りてきてエイサーを披露したこともありました。

戦後の換金作物の導入



楚洲は、公民館など空襲で全部焼けました。それで戦前の文書など何も残っていません。ユッパの資料なども見つからんでしょね。

戦後はものが出回らず、楚洲の共同店に酒がない

というようなことがありました。共同店に負債がたくさんある人も多かったんです。やがて一九五六年、海岸沿いに道路ができたために、キビやパインといった換金作物を作って出荷できるようになってきました。そこで力を合わせて開墾して、親川さんのお父さんの親川弘さんなんかの指導で土壌改良剤を入れてサトウキビをつくったらくよくきました。直径五センチ以上あるような太いキビが収穫できたんです。キビとパインをつくって、だんだん生活がよくなりました。復讐の時、ドルから円にお金が変わりましたが、交換額が各戸平均では楚洲が国頭村の中でいちばん多かったんです。こうして、自給用の芋をつくっていた昔からの段畑は放棄されてヤマ(やぶ)に戻っていったわけです。



▲長瀬さん（前列左から二番目）をかこんで

おひらき—その後(おひらき)

今回の語りには登場しませんが、ヤンバルの山は

沖縄戦の中で沖縄島の中南部から避難してきた人たちと地元の人たちが、食べるものもなく山中をさすらい、マラリアとあいまって多くの犠牲者を出した舞台にもなりました(『東村史』第三巻、四四七頁)。

調査の案内役を買って出てくださいました親川栄さんが調べておられる所では、伊部岳には、王府時代にのろしで首里王府に連絡をとるための「ヒータチ(火立)」と言われる遠見番所があったといえます。しかし、一九七〇年二月二十七日に、伊部岳は米軍によって山頂部分が高さ八メートルほど切り取られ、ブルドーザーで平らにならされてしまっていました。何らかの遺構が仮に残っていたとしても、現在それを確認することは絶望的です。

実は、伊部岳は、ベトナム戦争にむけて実弾砲撃のための海兵隊の訓練場建設の一環で削られたのでした。比嘉康文さんの著書(二〇〇一年)から、ユッ

パーのその後の物語として、その経緯をかいつまんで紹介しておきます。

発射地点では山頂が幅五十メートル長さ三百メートルほど切り取られ、着弾地点とされたのは、今回の聞き取りの中心になったユッパー周辺の山々でした。一九七〇年の十二月三十日に、翌日の大みそかに砲撃を開始するという米軍からの通告。国頭村の人たちは、雨の中、早朝から着弾予定地に入り、のろしを上げるなどの阻止行動に出ました。午前八時には村長や村議会議長、村議だった長嶺さんをはじめ、七百人もの人たちが山中に集まり、鉄条網を破り全員で発射台に登るといふ作戦をとります。シャベルや棍棒で殴りかかる海兵隊員に対して、「ここは私たちの山だ」などと叫びつつ泥をつかんで投げつけるといった抵抗をしながら約二百人が発射台に登ったところで、米軍は、ヘリコプターで機材の撤収を開始し、演習は中止に追い込まれたのでした。

このあとついに砲撃演習が再開されなかった理由として、ヤンバルの森にしかない希少なキツツキのノグチゲラの存在が大きかったといえます。まず日本野鳥の会が立ち上がり、山階鳥類研究所、日本鳥類保護連盟、日本鳥学会、東京動物学会の連名で、抗議文を各方面におくり、翌一九七一年の一月中旬までには、国際鳥類保護会議(ロンドン)、国際自然保護連盟(ジュネーブ)、世界野生生物保護基金、アメリカで三百万人の会員を擁するオードデュボン協会をも動かしました。その結果、当時沖縄を統治していたアメリカ政府の最高権力者であるラン

パート高等弁務官からの要請によって、在沖縄米軍から、国頭村の森林地帯では、今後いかなる射撃演習もおこなわないむねの手紙が、国際自然保護連盟に送られたのでした。一九七一年三月のことでした(比嘉、二〇〇一より)。

今回の旅では、自然環境と賢くつきあい、自然の資源を賢く使うとはどういうことか、という課題を現場で考えようと、仲間たちとともにヤンバルの森の中に分け入り、高齢者の証言を聞きました。そこで出会ったのは、森を唯一の糧とする日々を送った人々の足跡、一年足らずで取り尽くして廃業に至ったというエキス製造の釜場跡、さらに、暮しと自然を守るという両面からの取り組みが実って、ついに一度も使われることなく放棄された軍事施設をめぐる物語だったのです。

次回は、ヤンバルの海と人をめぐって、同じ問いかけを考えてみたいと思います。

【引用文献】

- ・奥間川に親しむ会、二〇〇〇『清流に育まれて——奥間川流域生活文化遺跡調査報告書』著者発行
- ・国頭村役場、一九六七『国頭村史』国頭村
- ・比嘉康文、二〇〇一『鳥たちが村を救った』同時代社
- ・東村村史編集委員会、一九八四『飢えとマラリア』『東村誌』第三巻、東村役場
- ・盛口満、二〇〇六『生き物屋図鑑』木魂社
- ・あんけい たかじ <http://ankei.jp>
- ・あんけい たかじ 『生き物屋』